

沖縄歴史の vol.14

散歩道

◆近代遺産を巡る⑤

琉球史研究家の上里隆史氏が沖縄の歴史文化の魅力を本誌上で連載しています。



大北墓（うーにしばか）の落書き
「昭和十六年」、「二高女」の文字 （今帰仁村）

日常における人々の何気ない行為や活動が、後の時代に貴重な資料となることがあります。その一つが落書きです。例えばローマ帝国の都市ポンペイの遺跡には住民たちの落書きが残っており、当時の暮らしや人々の気持ちがかがえるだけでなく、噴火の日付まで特定するなど重要な情報となっています。

沖縄でも実はこうした落書きが史跡に残されています。大北墓（今帰仁村）は16、17世紀に今帰仁グスクに常駐した北山監守一族の墓で、運天港の丘陵の崖を利用した墓ですが、漆喰で塗られた墓の壁面にはおびただしい数の落書きが確認できます。

それらは大正時代から昭和にかけての書き込みが大半です。たとえば「大正9年（1920年）」の日付で3人の男性の書き込みがあり、その1人は戦前の著名な教育家と同名同名です。また「昭和16年（1941年）」の「二高女」との落書きもあり、戦前の県立第二高等女学校の生徒とみられます。現代のマナーでは許されませんが、大北墓を観光の際、人々が記念に自分の名前を書くことが当時の慣習となっていたようです。

歴史上の人物・護佐丸の墓に落書きをしたという大正時代の新聞投書もあります。1915年（大正4年）2月、那覇の青年たちが中城城跡を見学し、護佐丸の墓も訪れて墓域のフクギの幹に文字を刻んだといま



護佐丸の墓前のフクギに刻まれた「首里バス」の文字 （中城村）

す（「琉球新報」1915年2月16日）。

その落書きを確かめるべく実際に護佐丸の墓を訪れてみると、確かに墓の前はフクギ並木になっていて、幹には何力所も文字を刻んだような痕跡が見つかりました。青年たちの落書きは確認できませんでしたが、その中の一つには「首里バス」と刻まれているものがありました。首里バスとは1935年（昭和10年）から1974年（昭和49年）まで運行されていたバスです。ここでも観光客の来訪記念として文字を刻むことが行われていたようです。

今となつてはこうした落書きは貴重な歴史資料です。まったく注目されず資料としての関心も持たれていませんが、消える前に記録・保存が求められています。



上里 隆史
(うえざと・たかし)

琉球史研究家。内閣府地域活性化伝道師。法政大学沖縄文化研究所研究員。早稲田大学大学院修士課程修了。著書に『琉球という国があった』（福音館書店、2020年）、『海の王国・琉球』（ポニーインク、2018年）、『マンガ沖縄・琉球の歴史』（河出書房新社、2016年）、『尚氏と首里城』（吉川弘文館、2015年）など。NHKドラマ「テンペスト」時代考証や、NHK「プラタモリ」案内人などメディアでも活躍。